銀鈴第貳拾參號（毎月一回二十五日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可　明治四十年七月十五日發行

銀鈴

第貳拾參號

我徒の用意

銀鈴社同人

地方雜誌の刊行せらるるもの、百を以て算し得べし、然れ共、うの能く新趣味の啓發に、努力し專念するもの、果して幾ばくをか指へ得べき。われ等敢へて揣らず、今の高名なる評家の論議に先ち、着々として實踐する所以は、偏に、自ら信ずる所に向つて驀進せむと欲する而已。彼岸は眞に遼か也。我黨の士女、幸ひに我等の用意を諒し給へりや。

銀鈴第貳拾參號掲載目次

我徒の用意(社告)……銀鈴社同人
報　酬(小説)……高城七星
春雜吟(俳句)……羽風梧月選
丙午の雲石歌壇(評論)……白箭朝
夏の海(短歌)……倉光活林
父(長詩)……月森神來
白雨(長詩)……海もく人
雜吟(俳句)……春子等

禁轉載

わくら葉(小説)……菅原紅雨
寄贈雜誌(批評)……記者
葵の葉(短歌)……森鴎桃村等
感想欄(雜文)……露子等
戰時紀念錄を讀む(批評)……翠滋生
文界片々(報導)……黒華子
陽炎會(俳句)……富田五呑報
哀音(美文)……蓮の浮葉

銀鈴

23

(明治四十年七月十五日發行)

報酬

とんちせい

看護婦が今脈搏を見て、熱を計って、簡單に二三の注意をして出て行った

「もう大分宜しいんですか、」

「さうですね、身躰の倦怠いのは依然ですが、氣分は餘程よくなった樣です、もと〳〵大したことはないんですかふね、」

「私ね貴方の樣な御丈夫な方が入院なすったといふので、驚いたんですわ、母なんかヒドク心配してたんですよ、」

「なアに何年ですもの、脚氣は僕につき物だ、脚氣なくして何のおのれが櫻かな、或はその邊が僕の價値のある處かも知れませんね、」

何だか譯のわからぬ事を驢列ると、「まア」と呆れて居たが、僕が笑つて居るので、

「その位冗談が云へる樣になつたらもう大丈夫ですね口惜しい程いつでも、貴方の口には乘せられて了うもの、」

名は道子、今年十八で保証人のうちの娘である、人ずきのする丸顔で、二重瞼が殊の外涼しい、嘗つて僕が「夏向きの娘」だと云ったので、「仕出しものぢやあるまいし」と怒った時の口元まで、涼しさうであると思ったこともある。

赤い絹ハンケチから、水の滴るやうな林擒を出して「母からね見舞ですよ」と、ベットの端へ並べながら、其處にあつた繪葉書に目をつけて、

「まあ奇麗ですことね、そして字がよく配合してることゝ……れや、」

と、驚いた樣子、裏を返して見て、更に素早く文句を讀んで見て、

「芳江さんぢやありませんか、だから私、何たか見たことのある樣な字だと思つてたわ、」

「さうです、」と簡單に、「見舞狀です、」

芳江とは、道子と姉妹のやうにして居る親しき仲の親しき學友で、僕が道子の家を訪づる〻度旬に、來てないことは殆んどない、敢へて云ふほどでもないが△△女學校の双美といはる〻それである。

「どうしたと云ふんです、大層感心してるぢやありませんか、それでは全然繪葉書と睨めくらをしてる樣なものだ、」

「ホ、、、だつて、芳江さんは字が上手のね、そして殊に候といふ字に特徴があるのね、」

「それは實際うまい、女にしてあれだけの筆蹟、は恐らく稀でせうね、」

貴女なんか遠く足下にも及ぶまいと、出かけたのを故意と白ばくれて、

「そして繪も大層うまいといふぢやありませんか、」

「さうですの、芳江さんは全く天才でずわ、それに毎週小山先生の家へ習ひに行つて被在るんです、それご覽なすたでせう、私の家の書齋の額ね、」

「ア、あの(春)と題した水彩畫でせう、そうですか、あれが矢ッ彫り芳江さんが書いたんですか、然し本人の芳江さんは否定して居たやうですよ、」

「いゝえ、芳江さんは温厚しいんですかふ、何時でも羞恥んで居らつしやるけど……、」

「とすれば實に驚くべき偉才ですな、そしてヰオリンの名手で、琴に堪能で、而かもその上にあの容貌で……、」

「まア貴方も芳江さんのことを、大邊れ褒めなさるのね、」

「でも、貴女もさつき天才だとか何とか殊に感服してたぢやないですか、」

「ホ、、、ろれは然うですけど、だつて芳江さんも始終貴方のことを、大層褒めていらつしやるもの、」

「ハ、、、然し、僕のは多少意味が違ふ、その贊辞の大部分は、只貴女の親友たるの條件の下に呈したんで

す、それも何とやらの一片の好意かも知れない、」

四五日を經て道子は(今度は芳江と同道して)、再び訪れて呉れた。

その翌々日、僕は愈々退院して、保養旁々海水浴に行くことに定めて、ろの前夜、全じく入院して居る親友に暫らくの別れを告ぐるべく、彼が病床を見舞つた。突如、僕は驚くべき事實を發見した、ア、僕は迄道子の道具に使はれて居たのだ、友はその夜、切なき彼が胸中を訴へて、そして一通の手紙を渡して云つた

「君、すまないが、これを渡して呉れないか、」

表には「山松道子樣」

然し、然し僕は尚ほ且つそゝろに微笑を禁じ得なかつた、焉んぞ知らむ僕は海水浴場に愛しき芳江の手を取らんとは、使ふものは亦使はるゝ、昨日突瑳の間にこの約束が成立したとは、よも道子は知るまい、これをしも當然の報酬と云ふべきであらう。

(六月五日稿)

春雜吟(第七回懸賞募集)

○ 羽風選

桃咲いて麴萌へ立つ日頃哉　波舎

乞ひ見たる女具足や桃の花　同

藍壺に燕の糞をいとひけり　同

燕や街道かせぐ靴磨　同

日輪に大凧逼り唸りけり　同

開墾の赤土畑や春の雪　峰秋

春寒や嵯峨の小家の竹細工　同

春水に明日蒔く種を浸し鳧　同

寫眞して戻る姉妹や春の風　同

殘雪や杉に日の洩る有馬越　五春

暖かや舟に指呼する綠島　同

朧月江尻の酒肆を叩きけり　同

踏青や琴彈く家に雨宿り　同

○ 梧月選

春風や羊に食はす歌反古　峰秋

選者曰、類句あり

焚火して朝を耕す餘寒哉　五呑

戀猫や二階障子の月の前　同

夕雲雀草津の酒肆の灯し鳧　同
殘雪や日蹴き谷の木挽部屋　同
朧夜の辻に逢ひたる巨人かな　同
行きちがふ雨の轍や飛ぶ燕　波舍

○　羽風、梧月選

盛砂に少し積るや春の雪　峰秋
淡雪や鉢に實生の五葉松　同
大江に舟橋渡す雪解かな　同
梅散るや妹が机上の烈婦傳　同
初午や何の藥に人群るゝ　波舍

○三　坐（登賞）　羽風選

人　暖かや舟に指呼する綠島　五呑
地　大江に舟橋渡す雪解かな　峰秋
天　日輪に大凧逼り唸りけり　波舍

梧月選

人　大江に舟橋渡す雪解かな　峰秋
地　初午や何の藥に人群るる　波舍
天　夕雲雀草津の酒肆の灯し鳧　五呑

丙午の雲石歌壇

白翁　選

（下の續）

(二六)松田松葉氏　作中、
ゆるしらず莨蒲きるにも力なき病氣すなり近江の國に
君が家夕雨ごとにきりぐす蚊帳に來鳴くと忘れぬ日かな
朝の月畫も虫なく君が家の城壁めける木立を思ふ

(二七)福田紫雲氏　作中、
ねほ夏や湖の最中に白帆しぬ君はかひなを手枕にして
遠世にも同じ涙の君あらば昨日を泣くとなげかぬ我も

(二八)社中同人のうちにも千代延春圃河野翠激大屋左一菅原紅雨等數氏の作中さすがと點頭かれるものが多かつた。

(二九)其他一二を算すると、多田東岳氏奥原碧雲氏及び古川三尺前田木風能海紫星松原葉櫻松本掬雨内藤漱川河野素陽福間如滑三島溪雲盥田白蘆梅原榛窓木村秋浦等の諸子も夫々活躍せられた、斯の道には經驗のないものでも花々しいことに思つた。

(三〇)總体について云ふと、前にも述べた如く、仲々活氣を呈してゐたものであつたが、中には稍々意氣銷沈の士もあつたし、新たに旗を樹てた新作家も見受けた。

(三一)固より詩作專問の人はないやうに思ふ、いずれも何か職業を有して、其傍ら歡興のまに〳〵清閑を偷んだといふ方面の士人ばかりであつたらしい。

(三二)尙一口云つて置きたいのは、昨年に於て發表せられた新聞紙所載のものに於て、「松陽」の方は可成精錬せられてあつたのに反して「山陰」の方は、兎角乱暴なものが多かつたといふ一事である。殊に常に發表せられてゐた稗の子とか云へる人の歌に至つては言語道斷と云はねばならぬ。作る人も載せる人も、均しく再考せられんことを望む。

(三三)書き度いことも咄したいことも多いが、貴重の紙面をと、遠慮してこの一篇を結ぶ。安罰多罪々々。

（完）

夏の海

倉光活林

丘の家青き風吹く夏の大野を眺め君と在るかな

夏の海日路にせまるや遠國の君を迎ふるよろこびに似て

なつかしき思ひ出すなり初夏の青簾つりたる郷の家

雪降りぬ因幡の國の山脈はああ一時の涅槃のさまに

うら淋し思ひに暮れぬ大海の底に沈める玉にしも似て

髮なびけ湖上に並ぶ家〳〵の青きすだれを思ひ出づる日

父

月森静來

ある日われ
人波もちらぐ市中に車ゆ下る――
白髪たれたる面長のひとりのれきな。
ろの刹那
心の奥に聲ありて高くさけびぬ。
「汝が求むなる汝が父はここによ」と。
いでさらば
問ひまつらむと只管に走りぬ。されど
その人あらず。あゝ永遠に父を見ぬかな。

白雨

海ゆく人

雨もよひ一天は
どす黒の雲走る。
あはひより弱々し
日の光りさと射れば
道ばたの斑ら石、
枯れし草、普請場の
材木と、大工等が
腹掛に、淡黄の
色照りて、戰場の
殘骸に秋の日の
さすごとく物凄し。
二階より大路見る、
藁葺の小き家
屋根板に用ゐたる
オールドの看版に
ばらばらと雨ふりぬ。
たちまちに一列の
暖簾つゝと下ろされて
人走り、犬驅る
美くしき人妻も
工女等も、八九人
遊び居しうなゐ等も
大聲に、程近き
家あるは店小屋に

騒ぎ入る。雷電の
ひと時に攻め寄する
けはひなり。――あゝひと時。
風やめば、美くしき
色に照り日ぞさしぬ。

○

知らぬ人なりと思へどなにとなく垣間見し
たきよろこびに居ぬ
ややありて答へまつりぬ「かばかりに胸さ
だまらぬ身なるべしやは」

雜吟

見し夢のみなつかしさよ春の雨　春子
曳き歸る鬼の寶や春の月　波舍
花曇り天正頃の太鼓鳴る（玄武社頭）
病ありて寒き端居や櫻梅の花
苗代に去來す比良の溝き雲　五呑
豆の花抜き捨てゝある水田かな
豆の花春たけなはの虻の聲
魚市の果てゝ人散る柳哉

わくら葉

紅雨生

「私、ほんとうに情けない思ひが致しますわ……だけど、私やッぱり……。」
斯う云つて、そつと袂で涙を拭いたのは、富子といふ女、年紀の頃は二十一か二、あまり美くしいといふ方でもないが、さりとて何處やらに、棄て難い風情がある。この頃深い愁ひに落ちて、それがためでもあらう、病にかゝつて床についた居る。富子の枕邊に座つて居るのは、彼が二無き親友の高子といふ、さらば同い年でもあらうか、色白の細面の、笑へば頬に、愛嬌の靨が刻まれる。
「……私しややつぱり忘れられんのですもの。」
同じ事を繰り返して
「高子さん、何うして私はこう不運に生れ合せたのでせう……これまで、憂いこと、辛いことは、度々ありましたけれど、皆ッなあの人のれ爲めを思つて、噫！ぢつと辛抱して居たんですもの……今更ら、あつさり切れろの諦めろのとは、あまりといへばあまり、西村さんも薄情な爲され方といふものだわ……私しや何う

したら可いんだか分りやしない……えゝひどいことよ……。」

帶とばかり夜具を噛み締める。高子の眼にも、清い露の光りが燦めいこ。

「あなたのお腹のうちは、わたしよく〳〵察して居てよ。だけどね、矢ッ張り駄目だわ、昨日も私、西村さんに逢つて、どんなにか頼んだのに、更にれ聞きへかないんだもの――到底川はぬ戀だから、自分も涙を呑んで、思ひ切る覺悟、富さんにも其う云つて呉れつてね。そりやね、あのれ方の事ですもの、貴女が厭になつたの、飽きが來たのつて云ふ、そんな薄情ぢやありませんけれど、浮世の義理ッてものがあるんだから……貴女もあつさり思ひ切つてね、何も彼も諦めつ了うが可いわ、もう何んなことがあつたつても、決して西村さんのことなんか、思つたり言つたりしちや不可こと よ。而して、貴女も早く、身の方向をれ定めなさいましね、それがいゝわ……。」

世にも情けある友の諫言を、聞いて居るのか、何うだか、富子は夜具引ッ被いで、さめ〴〵とばかり。搔卷を溢れて、艶に香へる黑髮は、もらもらと打ち顫へる。

「あゝ高子さん、私あやまりました。これまで種々と貴女に御心配を懸けてすみませんことね。私もう、決して々々あのお方の事は――夢にも思やしない、一切運命だと諦めませう……奇麗に諦めッ了うわ。」

しやくり上げて、

「何うかあのれ方に、爾う云つて下さい……高子さん私はもう、さつぱり忘れて了いました！……と。」

堪へずやひひと、聲を立てゝ泣いた

高子も俱に、暗然として。

――完――

寄贈雜誌

▲文車（三の二）見るべき無し▲五月（四の五）句數四百盛なりと云ふべし▲藻の花（四の一、二）本箱浮れ鴉等の滿載を望む▲白虹（三の二）獨逸及佛國のロマンチズム岡山文學小史文藝時評等興あり▲野の花（紀念號）茫然たる大冊東都の雜誌を凌ぐものあり與謝野晶子溥田泣菫小島烏水小坂眉水天馬生中尾紫川諸子の作めでたし夕暮芦華淡翠薫園醉夢の作寧ろ抹削するに若かず▲初雁（一の五、六）新季寄考を採る▲浮城（四の六、七）いつ見てもキザ無き雜誌なり野人語必ずしも野人語なふず▲朝虹（三の五、六）與瀬霞翠の詩を採る▲浪花（三の二）▲茶話會（二）▲明ボノ▲三餘の友▲無限思潮

葵の葉

森脇桃村

美はしき君がみ手とり故郷の夏野の
末に在りぬ日を經て
一語なくあゝ立つこの日君とわが幾
歩の間に風かほるかな
繭買ひも馬曳く子等もはたはたと扇
す木かげ草踏める時
髮なびけ薄き衣して少女等はひとり
の君と風とめで居ぬ
山の温泉の湯氣たちこむる欄干に黑
髮梳る顏白き人（有福温泉にて）

花あやめ

こゝろ今いつはりもなし君戀ふるこ
の手まねちばいかゝし給ふ（人に）

奥原碧雲

朝市や南大門のあけ方に被衣の人を
かいまみしかな
よき人の被衣のひさしそとあげて見
かへる眼のうるはしき哉
薪ひて小牛ひき來る朝市や大路ほ
の〴〵夜は明けて行く（以上、京城南大門
朝市にて）
王城のいらかすたれてぬり禿たるき
のあたり蝙蝠のとぶ（以上景福宮にて）

春子

七夕の惜しき分れのちぎりこそ地な
るわれ等が戀のさまなれ
力なき黑髮なれど猛者等曳く權威を
たゝへ歌よみて居ぬ

菅原紅雨

君戀ふるとはの迷ひの今さめてよろ
こびみつれ心泣くかな
宵々に君がれもかげ夢に見て泣けば
いさゝか心なぎぬれ
わが胸の墳墓訪へば刻されし君が名
立てり露にそぼちて
戀草はつひにしなへぬ温かきみ息の
うちに培ひながら
君見たるその一瞬はよろこびぬ今日

の愁ひのありと知らねば　椿　靜君

知らぬ間に何者の來て實蒔きしや戀草青く芽ぐまむとしぬ

風そよぎ草の香わたる夕月に君がみ窓の灯ぞほのゆる

今宵しも君が來といふすさまじき强雨もするか胸のうつろに　河野翠瀲

なにごとのよろこびやあるわれ答ふやうやくにして君を迎へぬ燈心のじじと音する夜の寂に心に歸るかなしみを追ふ

「たやすげにのたまふかもゐ」「さらばまた誰をか雙つ戀ひむとするや」夏のかぜときめく胸のかりそめの誓ひを吹くやいともたふとき少女いふ雙つ心を持ちたまふ君を不覺に戀ひし罪なれ

感想欄

△世の中に、清い美くしい戀にあくがれて「命も絶え、よ」とばかり、思ひ思つて居た二人が、强い恐ろしい果敢ない運命に壓倒せられて、とう〳〵悲慘な別れをする程、同情を寄すべきものはあるまい（露子）

△此度び、皇太子殿下山陰道行啓に就いて、濱田で紀念繪端書が丁度十二万三千　賣れて、三日の日には店頭更に一部を剩さなかつたつてね、これでこそ繪端書も本望よ……序でに大橋のアーチね、あれが三百圓だとさ、まあ物が言へないわ。

△二中、ではなかつたわ、濱田中學校の何やゝ文學士の君のお作の「奉迎の歌」、まあ能くもあんなれ歌が出來たことね!!其筈よ、顏の皮が三枚だつてさ……あちゃとしたことが。

△「萬朝報」の「天才」は何だかつまらんのね。（以上、濱田鬼美人）

△高山樗牛逝いて、わが評論壇は實に寂寞荒涼たるものである。長谷川天溪後藤宙外島村抱月角田浩々歌客の諸士、永き惰眠より覺めざれば、嗚呼わが評壇を奈何せんやである。（楓村逸士）

戰時紀念錄を讀む

翠　瀲　生

畏友河峯卓郎氏、自ら編する所の「三十七八年戰時紀念錄」一部を贈る。固と文壇の作物として議すべきものにあらずと雖も、幾多悲慘の事蹟が這の間に潛むものあるを思へば、筆錄の裡、豈感得すべき多少の趣致なしとせむや。

戰時に於て、氏等が試みたる賞すべく欽すべき事業の如きは、乞ふ、わが批評の立場より姑らくこれを除外し去らしめよ。蛍雪二十餘頁に涉れる戰病死者軍人の小傳、家族の美談等は、直ちに取つて以てわが詩材たらしむるに値す。行文聊さか批議を加ふべきものあり。雖ども、而かも序次整然、流暢温健なる筆路の能く讀者を動かし泣かしむるものあるは、近時屢々某々紙上に見る似非美文の匹にあらざる也。文章家ならぬ氏が、忙中の餘技亦慕ふべき哉。

冊は光澤紙百十余頁、題字序文を添ふ、菊版洋綴、表紙は全面藍鐵色、金字を施し、極めて質素なるものなり、余が嗜好に愜ひたるのみならず、此の種出版物に最も適せるものといふべし。

余は、之を世の爲政家教育家は固より、廣く文壇の作家が余考とすべき良著述なるを思ひ、哀心より、余が書架に置くことを得しめたる卓郎河峯氏の好意を謝す。多罪

文界片々　黑華子

◎與謝野寛北原白秋吉井勇中野萬里の四氏は七月下旬又は八月初旬に於て九州に旅行すべしと、

◎窪田空穗吉江孤雁兩氏は何れも鄕里に於て、本春女學校卒業の新妻を迎ふる由。

◎本社々友後藤藤郎は客月母堂病氣のため、駛せて故山に歸れり。

◎竹越三叉氏は「讀賣」を退くべしとの風說あり。

◎舊本社同人大屋左一は慈母病氣の報に接し、客月匆惶歸國せり、近く再ひ上阪すべし。

◎社友藤本晄花は病氣全癒、大阪東京等を歷遊し客月中旬鄕歸せり。

◎西園寺首相の文士招待會は三日に涉り官邸に於て催され、知名文士の走せ到る者露伴鏡花風葉天外桂月春葉魯庵小波藤村獨歩濱柳園柳浪眉山花袋等なりし

陽炎曽五句集　（備前岡山）

春の動物の巻出句者貳拾名

幹事　富田五呑報

花に夜は明せぬるあり百千鳥　虱天樓
櫻散る谷間の水や初もろこ
板敷や籠をこぼるゝ小蛤
林中に五畝の畑や雉子立つ　上の太子
並びならぶ結界石や雀の子　青嵐
相對して事なき陣や雁歸る
留守の戸に鷄鬪えり桃の下　可長
雲雀鳴くそこら牛耕馬耕哉　六合
薪割る門虻來る日來ぬ日哉　仝
木賃米炊ぐ流れや蛙の子　梧風
杉の谷檜の谷や呼子鳥　不羈
頂の雉子下りて飲む瀧の水
水草の芽をふく澤や蛙の子
山吹の散る下を行く小鮎哉
龜鳴いて法座眠たき日頃哉
人妻の蠶にやつす化粧哉　仝
佛事客皆いにし夜や鳴く蛙　不羈
捨繩に田螺群れつく小川哉　草の月
沈み居る鍋を上ぐれば田螺哉　仝
京町の古き酒屋や燕の巣　仝
南に飛ぶ鷺や愛宕山　閑山
蠶飼ふ貧しき明の遺民哉　仝
桑畑や小雨濡るゝ雀の子　北浪
首半分田の波かふる蛙かな　魚鱗
もの黄く見ゆる病や虻の聲　仝
曇り日の温き野風や揚雲雀　花溪樓
雁歸る磯暖かし汐曇り　仝
落水の泡消ゆあたり柳鮠　破鐘
我池に川水引けば柳鮠　仝
崖の草危なき花に虻の聲　村雨
山腹に五畝の水田や蛙鳴く　仝
蝶々の風に消え行く曠野哉　矮松
孕み鹿堂下に臥して暮の春
鳥交る枝垂れ柳や池の上　ゐばら
鮎波みの網を振へば朽葉哉　肇郎
鶯の鳴く三月堂や春寒し
幹事　吟
雲鳴いて菜原の雨に暮遲き　五呑

社告

○遲刊のわけ詫　本誌本號は翠滋多忙なりしため意外に發行を遲らしめたり次號は八月下旬正しく刊行すべし

○俳句募集　從來俳句の應募極めて少數にて甚だ之を遺憾とせり、奮て寄稿せられんことを望む△課題夏季雜吟△二十句以内△選者羽風梧月兩氏共選△同一の句二通に明記△天地人六名へ薄賞を贈る△〆切七月末日

○丙午の雲石歌壇　は好評聲裡に、本號を以て終結せり。筆者の誰なるやは、屢々諸君より尋ね越さるゝ所なれども、姑らく之を秘し諸君の想像に任せんとす。意外の邊より名乘り出づべき白箭朗の正躰は、蓋し諸君の想外に出でむ。

○通信を求む　社友中久しく消息を絶たれたる向あり何卒最近の御動靜御報導被下たし。

○誤解する勿れ　屢々誌上にて言へる如く、本社は決して營利的に發行するものに非ざるを以て、本誌の寄贈を求め、又は前金切發送停止の酷なるを責められゝとも、本社は斷じて如斯要望に應ずることなし、本社の財政は常に不足を告げつゝあり。幸ひに誤解する勿らんことを望む。

銀鈴社清規

一　文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たることを得べし

一　社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す

一　社友は社員同人を經て本誌編輯其他の議に參與することを得

一　社友には有効期間毎月銀鈴を無代配送すべし

一　支部（社友五名以上）社友は本社直接の社友と同一の待遇を得べし

投稿募集

一　和歌　一　俳句　一　美文
一　小說　一　評論文　一　長詩
一　小評　一　小品文　一　社友月旦
一　文壇消息　一　歌會句會の詠草

用紙は半紙一枚二十行とし一行二十四字詰。種類を異にしたるものは各別紙に認むる事。〆切は毎月十日。投稿は其幼稚なるものと雖も可成補正採用す。秀逸なるものは社中同人の議を經て薄謝を贈る。社友以外と雖も投稿隨意但賞を贈らず。

銀鈴第貳拾參號（毎月一回二十五日發行）明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可明治四十年七月十五日發行

哀音

蓮の浮葉

きのふけふ嬉しきことのみの打ち續きて候。涼しき朝風の、紹蚊帳に度り候ほどに、起き出でゝ、髪梳んやなど思ひ居り候端居の手に、まづこまゞとのおん消息うけとりまゐらせ候。悲しく沈みがちなるわが上、かばかりみ心に懸けさせられ候み情けの、しみゞと、うれしくありがたく、いつの世かわすれまゐらすべき。

あとふたつこの地にすぐし候へば、西に向ひて旅立つべく候、遠からず、み手にすがりてまのあたり、かこちまゐらすべき、悲しの運命も、いまはうれしくたのしく候。

銀鈴定價表

定價	郵税	廣告料
一部 金五錢五厘	金五厘	一行五號活字二十四字詰貳拾錢半頁貳圓
六部 金參拾錢	……	前金切は帶封に朱圈
十二部 金五拾五錢	……	

銀鈴第貳拾參號

明治四十年七月十三日印刷
仝 四十年七月十五日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人 河野岩雄
仝 縣仝 郡川本村大字川本五三八
印刷人 原八太郎
仝 縣仝郡仝 村大字 仝五三八
印刷所 邑智活版所

發行所 島根縣邑智郡田所村 銀鈴社

來れ我黨の士女!!

文學雜誌 銀鈴

定價一部五錢六部郵稅共前金參拾錢郵券一割增第二十三號既刊(菊版滿洒)

●主張

憲章、法政、衣冠、建築の美、いかに善く整ひたりとも、一代の好尚今の如くんば、藝術の大成、夫れいづれの日ぞ。文藝を通じたる眞の趣味民衆を布かば、風俗の改善、教育の感化、亦容易なるべく、一世の風尚燦然として更まらむ。文藝の趣味造詣なき人々の談理は、いたづらに枯淡凋落に陷り、精醇温雅の姿致に缺ぐ、如此くば一般學儒の言議と擇ぶなく、延きて當代の衆庶を誤りなむ。果して何の誇る所ぞ。我徒の事業は、微細語るに足らずと雖ども、主張とする所、畧ぼ上述の如し。固より長安大道の易きを欲せざれども、來り援くるあらば、我徒の幸ひ、之に過ぎたるは無けむ。

一 最も進歩したる趣味と形式とは我等の常に渴慕する所也

一 本誌は常に中央斯壇の思潮に後れざらんとを期す

一 本誌は騷壇知名の士の後援を有す

一 懸賞俳句募集と和歌無料添削とは讀者に對する待遇の一斑なり

一 和歌は明星派、俳句は日本派每號偉觀を極む

一 小說論文批評歌俳新躰詩感想等掲載の事項極めて豊富なり

一 現在社友は師範中學高等女學校等に多くを有す

一 社友は六ヶ月分參拾錢前納者たるべし事情の如何及び交誼の親疎を問はず前金外は斷じて本誌を發送せず

一 見本は郵券六錢を要す

發行所 石見國邑智郡田所村 銀鈴社

編輯同人

河野翠瀛
菅原紅雨
朝日山錦水
千代延春圃

銀鈴號外明治四十年八月一日印刷發行明治四十年一月十四日第三種郵便物認可(每月一回二十五日發行)編輯兼發行人河野岩雄石見國邑智郡田所村銀鈴社發行印刷人仝郡川本村大字川本原八太郎